

## CONTENTS

文化人の本音 河合隼雄文化庁長官対談  
第8回 ゲスト 竹宮恵子さん ●漫画家

漫画をとおして通じ合う	4
長官コラム 文化庁の抜穴	9

## 特集 世界への舞台芸術の発信

文化庁提言 舞台芸術国際フェスティバルの開催	河合隼雄	10
有識者提言 アジアのポップスは今	小倉エージ	12
舞台芸術国際フェスティバル プログラム日程		13
論文 アジアのオーケストラの現在と未来	小倉信宏	14
施策紹介 文化庁における音楽振興策について	芸術文化課	16
インタビュー 舞台芸術国際フェスティバル「ポップアジア2002」 参加ミュージシャンへのインタビュー	芸術文化課	18

連載	ことばの探検⑧ クイズ擬音語の話	山口仲美	22
	インタビュー 未来の扉⑧ 豊竹呂勢大夫 (人形浄瑠璃文楽太夫)		23
	いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート④ つくばキッズアーティストクラブ		26
	茨城県つくば美術館		26
	舞台の現場から 舞台を支える人たち⑧ 文楽の小道具の大きさ		27
	国立文楽劇場	森永 伸	27
	美術館と著作権契約(第2回)		28
	子どもたちから見た伝統的建造物群保存地区 高山市三町(岐阜県高山市)		29
	日本の伝統美と技を守る人々 選定保存技術保持者編20 昆布尊男(漆漣紙(吉野紙)製作)		30
	在外研修だより 新進芸術家在外研修報告⑧	森永明日夏	31

文化庁ニュース	平成14年秋の 叙勲、褒章受章者が決定	32
	第49回日本伝統工芸展	34
	平成14年度 文化庁舞台芸術創作奨励賞作品募集要領	36
	平成15年度 映画芸術振興事業の募集について	38
	現代日本文学の翻訳・普及事業の対象作品に ついて(平成14年度・15年度)	39
	平成14年度「文化芸術創造プラン(新世紀 アーツプラン)」について(第3次採択分)	40
	奈良国立博物館 親と子のギャラリー 一遍聖絵	41
	東京国立近代美術館 企画展 松田権六	42
	東京国立博物館 東京国立博物館の講演会、講座シリーズ	43
	東京文化財研究所 公開学術講座	44

新国立劇場スポットライト	45
12月の国立劇場	46
芸術文化振興基金ニュース	47
題字デザイン 桑山弥三郎	

今月の  
表紙  
ポップアジア2002  
「Voices of Asia」  
2002.9.22

# アジアのオーケストラの現在と未来

芸術文化調査官  
小倉信宏



さる九月二十五日から三〇日まで、東京オペラシティのコンサートホールにおいて、『アジアオーケストラウィーク』が開催された。『舞台芸術国際フェスティバル』事業の一つとして実施されたもので、今回は、タイ、フィリピン、オーストラリア、中国、韓国の五か国からそれぞれ、バンコク交響楽団、フィリピン・フィルハーモニック管弦楽団、クイーンズランド管弦楽団、中国国家交響楽団、プチョン・フィルハーモニック管弦楽団の五つのオーケストラが来日して演奏を披露した。

古典派やロマン派をはじめとするクラシック音楽のおもなレパートリーを演奏するためには、六〇人からときには一〇〇人を超える演奏人員を必要とするオーケストラのような団体にとって、いたずらに遠くへ出向いて演奏活動を行うことが経済的側面から不向きなのは自明のことである。オーケストラには、自らの属する地域社会と密接なかわり合いを持ちつつじっくりと腰を据えてアンサンブルを練り上げ、演奏団体としてほかにはない個性を確立することが本来的に強く求められており、必然的にその奏でる音楽には、その地域の社会や文化が色濃く反映されることとなる。

起用した協奏曲で、後半を比較的オーソドックスなオーケストラのレパートリー作品でプログラムを構成してもらったので、ある程度各国のクラシック音楽の現状がそのまま伝わる演奏会となった。

使用している楽器自体の性能に問題があるのではないかと感じられたり、技術的にもまだまだ未成熟な部分を感じさせる面が見受けられたりもしたが、コンサート会場に響いた音楽はまぎれもなくそれぞれの国の国民性や風土を強く感じさせるものであった。それにもまして、フレーズの一つひとつに真摯に取り組む姿勢や熱気にあふれ、音楽を奏でるよろこびに満ちた演奏は、技術的な巧拙をはるかに超えた次元での感動を呼び起こす、演奏行為の根源について改めて考えさせるものであった。

近年、国際的なコンクールの入賞者に日本人を含めたアジアの若い演奏家が名前を連ねないことはなく、小澤征爾氏のウィーン国立劇場音楽監督への就任に改めて触れるまでもなく、海外で高い評価を得て活躍している日本人は決して少なくない。また、韓国出身のチョン・ミョンフン氏は東京フィルハーモニー交響楽団の常任指揮者として我が国において絶大な聴衆の支持を受けている。こうした個人のレベルにおいては、アジアからすでにクラシック音楽界に欠くべからざる多くの人材が輩出されているし、今後その数はますます増えていくものと思われる。

しかし、ことオーケストラとなると、世界に向けてアピールする機会すらなかなか得られないのが現状である。今日我が国では、欧米の著名オーケストラの招へいであれば、民間の音楽事務所等によってすでに数多く実施されている。しかし、世界へ羽ばたく契機を待ち望んでいるアジア諸国のオーケストラに対しては意外なほど情報すら少なく、アジアの現代芸術に関して我々日本人が知るところは思

いのほかに少ないというのが現実である。

アジアの音楽の魅力は、なによりもまずその多様性にある。その多様性が最も直接的なカタチで示されるのは、それぞれ固有の楽器と独自スタイルで演奏される各国（各地域）の伝統音楽であろう。長い時間をかけて培われたそれらと比較するならば、西洋楽器を用いたオーケストラのアジアにおける歴史は、まだ始まったばかりといっても過言ではない。今回来日したオーケストラのほとんどが、創立後まだ二〇年から三〇年ほどであることを考えても、長い熟成の期間を経て成長していくオーケストラという『楽器』としては、まだ原石の段階にあるというのが、多くのアジアのオーケストラにとっての偽らざる現状であろう。アジアのオーケストラの未来は、個性的で豊かな伝統の上に、その原石をいかに輝きあるものと磨き上げていくにかかっている。

五年ほど前のことになるが、『オーケストラ・サミット・イン・ジャパン1997』が、すみだトリフォニーホールを会場として、アメリカ、カナダ、イギリスなどのオーケストラ連盟の代表者、アジアや

オセアニアのオーケストラの代表者など約一〇〇名の参加を得て開催された。その第一日目には『アジア・オーケストラ会議』が行われ、運営資金調達問題、優秀な教師の不足、良質の楽器の不足、欧米との交流の困難等、アジア・オセアニア地域のオーケストラ活動の抱えるさまざまな問題や今後の課題について活発な議論がなされ、第二日目の国際オーケストラ連盟との合同会議後には、『アジア・太平洋地域のオーケストラ連合』の発足が宣言された。その後二年ごとに同連合の会合は開催され、日本はその中でリーダーシップの発揮を大いに期待されている。

さまざまな成長段階にあるオーケストラがその現在の姿を実際に演奏の場を共有することによって、互いに大いなる刺激を受けつつ、自らのあるべき未来へと歩を進めるための貴重な機会として、今回の『アジアオーケストラウィーク』のような事業が、文化の交差点としての役割を我が国が果たしていく上で、非常に有効な手だての一つとなり得たのではないかと感じている。

◆長官対談◆

〔文化人の本音〕河合華雄文化庁長官対談  
安藤忠雄 建築家  
〔長官コラム文化庁の抜穴〕

◆特集◆

独立行政法人国立美術館・博物館の  
一年を振り返って

〔文化庁提言〕  
独立行政法人の評価について  
……………湯山賢一 美術学芸課長  
〔論文〕  
独立行政法人国立美術館の一年を振り返って  
……………独立行政法人国立美術館理事  
独立行政法人国立博物館の一年を振り返って  
……………独立行政法人国立博物館理事  
〔施策紹介〕  
独立行政法人国立美術館・博物館に係  
る業務の実績に関する評価

◆連載◆

〔ことばの探検〕……………山口仲美 埼玉大学教授  
〔インタビュー 未来の扉〕  
市川実日子（女優）  
〔いきいきミュージアム〕美術館博物館事業レポート〕  
八尾市歴史民俗資料館  
〔舞台の現場から〕舞台を支える人たち〕  
音響 新国立劇場  
〔子どもたちから見た伝統的建造物群保存地区〕  
東部町海野宿  
〔美術館と著作権契約〕  
広報用の原稿を書いてもらうこと  
注意すべきこと  
〔日本の伝統美と技を守る人々〕  
瓦屋根音 木真也・山本清一  
〔在外研修だより〕  
在外研修員 森永明日夏  
〔文化ボランティア通信〕  
◆文化庁 ニース ◆  
長官表彰  
地域文化功労者決定

文化庁月報 11月号 (通巻410)

平成14年11月25日印刷・発行

編集—文化庁

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2

発行—株式会社 ぎょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12  
本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16  
電話 編集 03 (3571) 2126  
販売 03 (5349) 6666  
URL : http://www.gyousei.co.jp

印刷所—ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円 〔本体514円〕送料76円  
年間購読料6,480円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先  
（株）ぎょうせい営業部広告課  
電話03 (5349) 6657 (ダイヤルイン)  
©2002 Printed in Japan ISSN 0916-9849

本誌は本文用紙再生紙を使用しております。

編集後記

今月号の特集の中心である、「平成一  
四年度文化庁舞台芸術国際フェスティ  
バル（IPAF）」は、今年度文化庁が  
新たに開始した施策ですが、我が国の舞  
台芸術の発展のためには、このようなフ  
ェスティバルをおこなって、我が国の舞台  
芸術を世界に発信していくことが必要と  
考えられます。  
今年度のIPAFはテーマを「音楽

も今 アジアから」として、アジア各  
国からアーティストを招き、二三日間に  
及び公演を行いました。それぞれの公演  
において、舞台上で、観客席でアジアの  
方々との交流が見られ、喜ばしい成果を  
あげることができたと考えております。  
しかし今年度のIPAFにはいくつか  
の問題点があったことも確かです。来年  
度以降はそういった問題点を改善し、真

に我が国の舞台芸術の発展に資するもの  
にしていかなければなりません。  
今回は、今年度のIPAFに携わっ  
ていただいた方々から文章を寄せていた  
だき、あわせて、文化庁における音楽振  
興施策と実績を紹介させていただきました。  
今後の成功によって、我が国の舞台  
芸術がさらなる発展をとげることを期待  
いたします。（MK）

お詫びと訂正  
本誌平成一四年度一〇  
月号の表紙及び目次に  
おいて野村万之丞氏のお  
名前前に誤りがありま  
した。  
（本人はもとより読  
者の皆様、関係諸氏に  
お詫び申し上げますと  
ともに訂正させていた  
だきます。）

文化庁では、ホームページで、文  
化庁に関する情報を幅広く提供し  
ています。ご意見、文化庁月報の  
感想などを、ホームページのご意  
見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●  
http://www.bunka.go.jp